

勇者 The brave man took everything,
but I'm a confirmed happy man and I don't "Zamaa"!!! 幸せ確定の

俺は

「ざまあ」
なんてしない!

石のやっさん

Ishino Yassan

Illust. サクミチ





ケイト

勇者パーティのメンバーで剣聖と呼ばれる剣の使い手。女の子と魚釣りに目がない。



シエスタ

元奴隷でケインに解放されメイドになった。なぜか給仕するより戦う事の方が多い。



アイシヤ

その凛々しさから剣姫と名高い女剣士。実は可愛い側面も…？



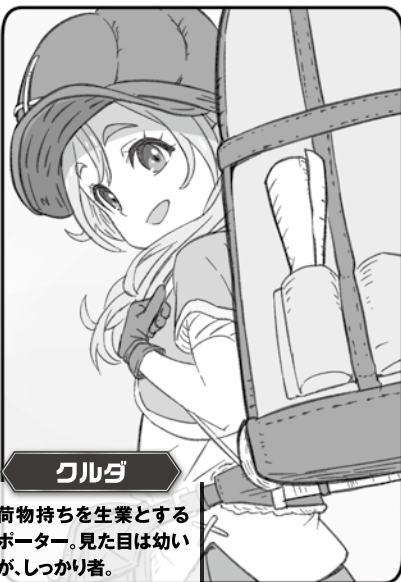
メルル

回復魔法を得意とするアークプリースト。何かとドジをしがち。



リヒト

パーティを私物化するため幼なじみのケインを追放した勇者。



クルダ

荷物持ちを生業とするポーター。見た目は幼いが、しっかり者。



アリス

アイズドルの名を持つ魔法使い。名前に反して勝気で喋り。



ケイン

勇者パーティを追い出された元英雄のSランク冒険者。酷い仕打ちを受けても勇者達を憎めないほどのお人好し。

第一章 さらば、勇者パーティー

「悪いが今日でクビだ」

パーティーリーダーであり、勇者のジョブを持つリヒトが俺に告げた。

さらにリヒトは憐れむように続ける。

「今までずっと仲間として支え合いながらここまで来たよな……だが、お前は俺達と力の差が開きすぎた。わかってるだろ、ケイン」

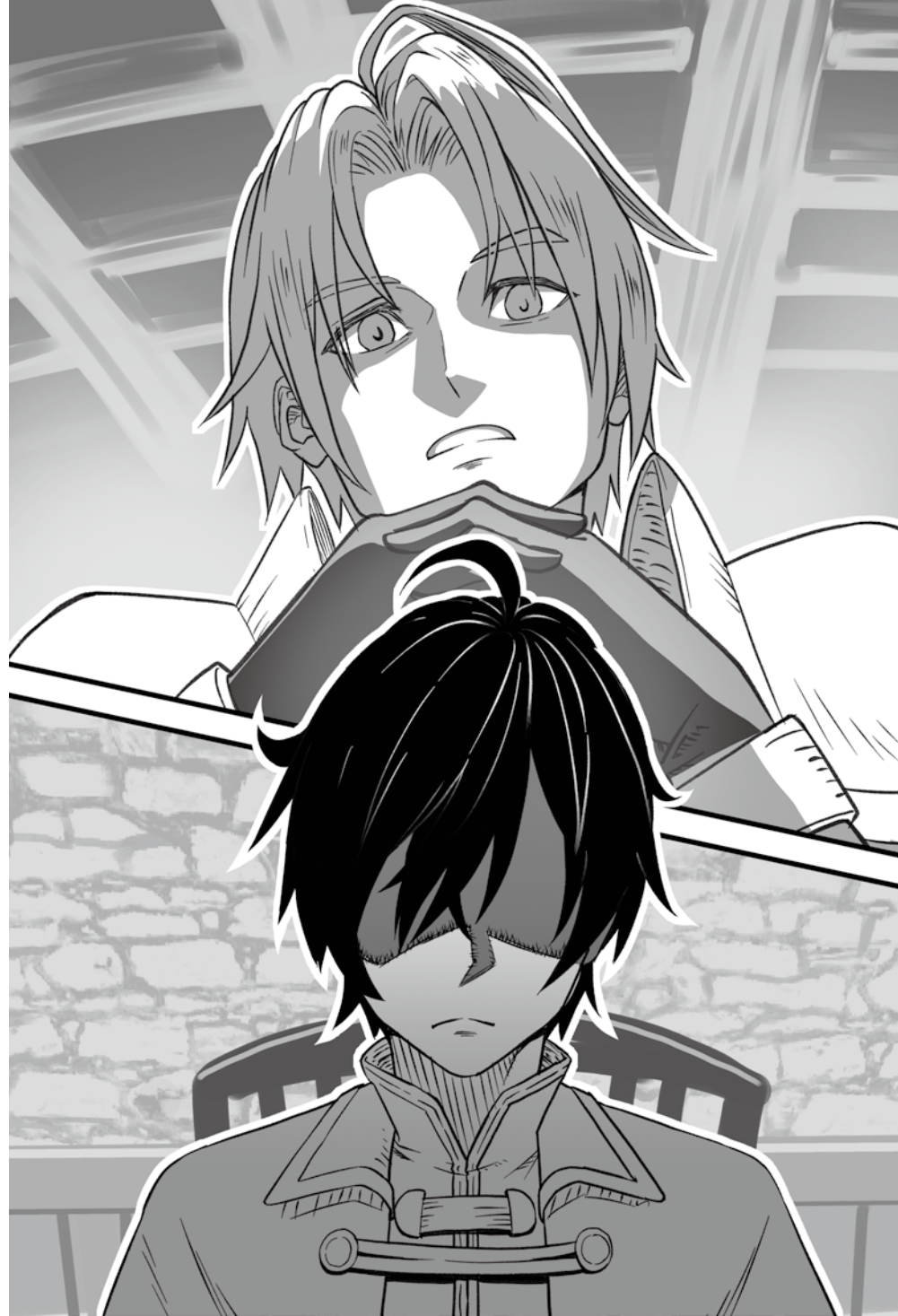
確かに最近の俺は取り残されていた。

勇者のリヒト。

剣聖のケイト。

聖女のソニア。

賢者のリタ。



そして俺、魔法戦士のケイン。

五人揃ってSランクパーティ「ブラックウイング」。

俺達は幼なじみでもある。

だが、成長した四人に、俺は追いつけなかった。

とはいえ、別にクビになっても良いと思っていた。

この世界では、冒険者ギルドが格付けするパーティのランクと冒険者のランクがある。

俺はこのパーティでは落ちこぼれだけど、冒険者ランクはSランクなのだ。

ここを出れば、いくらでも拾ってくれるところがある。

こいつらにはついていけないかもしれないが、他のSランクパーティならまだ通用するし、Aランクのパーティまで落とせば引く手あまただ。

俺にもそのくらいの価値はある。

「確かに魔法戦士の俺じゃ皆についていくのは難しいな」

俺はリヒトにそう言った。

幼なじみである俺にはこいつの狙いがわかる。どうせハーレムが欲しいだけだ。

俺とリヒト以外のメンバーは全員女だからな。

だが、リヒトはもっともらしい理由をつけたいようだ。

「勇者として飛躍^{ひやく}するには大きな手柄が必要になる。残念ながらお前とじゃ無理なんだ。わかってくれるだろ？ それに、パーティを抜けてもお前が親友なのは変わらないからな」

俺は他のメンバーを見回す。

元恋人である賢者リタの目を見た。彼女はもう昔のような優しい目をしていない。リヒトの女になっただけは知っていた。

リタが口を開く。

「私もリヒトの意見に賛成だわ！ あなたはもうこのパーティについていけない。きつと近いうちに死ぬか大怪我をするから、さっさと辞めた方が良いわ。これはあなたの事を思っ言っているのよ」

「リタ……そうだよな。ありがとう！」

俺はリタに微笑^{ほほえ}みながら礼を言った。

ふと、リタの左手に目がいく。

薬指には見覚えのない指輪があった。これは恐らくリヒトが買い与えた物だろう。

俺があげた指輪はもうしていない……

勇者と魔法戦士ではジョブとしての価値が違いすぎる。リタがリヒトを選ぶのも仕方ないと諦^{あきら}めがついた。

ちなみに他の二人も同じ指輪をはめていた。

ハーレムパーティに俺はいらない。

まあ一応確認だけしておくか。

「リタ……二人の関係は終わりで良いんだな」

「……」

リタは答えない。俺はさらに問う。

「君の口から聞きたい」

「もう、あなたを愛していない」

そんな事はもうとっくにわかってた。あくまで確認だ。

俺はリタに笑ってみせた。

「まあ、リヒトは良い奴だ。幸せになれよ！」

リヒトの名前を出すと彼女は驚いたようだった。

「し、知っていたの？」

「ああ。まあ、仕方ない。リヒトは勇者だ。こいつなら諦めもつく」

「ごめんなさい！」

「気にするな」

俺にとつては今さらどうでも良い事だ。
そこへリヒトが割って入る。

「もういいだろ。村に帰って田舎冒険者になるか、別のパーティを探してくれ」

「そうだな、俺は他に行くよ」

こいつは俺とリタが付き合っているのを知っていて寝取った。

親友だと思っていたのにな……馬鹿野郎。

リヒトは勝ち誇った顔で俺を見ている。

思いつきり、俺をあざ笑っているんだな。

何をしてても優秀で、顔も良くて、強くて、おまけに勇者だ。

そんなお前が、俺は自慢だったんだ。

彼らに背を向けると、四人の幼なじみが一斉にお別れの言葉を言ってくる。

「じゃあな！」

俺はそれに元気に応えた。

リヒト達と別れた俺は一人町をぶらついていた。

実は俺、ケインには、前世の記憶がある。

日本という国で小説好きの学生だった、というだけのものだが。

その時によく読んだラノベのテンプレで「ざまあ」というのがあった。今の俺はそれをしてもいい状況だが……別に「ざまあ」なんてしなくて良いんじゃないかな？

そもそも、俺は巻き込まれて勇者パーティにいただけなんだ。

どうやってこの世界に來たのかは覚えていないが、気が付いたら俺は十歳ほどの少年になり、ある村にいた。

そして、村にいた幼なじみが全員、四職——勇者、聖女、劍聖、賢者だったのだ。

ちなみに四職というのは、魔族の四天王及び、魔王を倒すために必要と言われているジョブの事だ。

魔族は魔王に仕える存在全てを指す。四天王はその中でも特に強大な力を持つ四人が持つ称号である。

幼なじみがそんな大変な戦いに巻き込まれるんだ、俺だって何もしないわけにはいくまい。それだけの事だった。

勇者パーティなんて、歳をとつてもずっと冒険しなくてはならない。定住はできないし、旅が終わる頃には爺さんだ。

それに、勇者パーティは名誉のために大金を捨てなきゃならない仕事なんだぜ。

普通はワイバーンを狩れば一体でも大金が入る。日本円で約五百万円くらいだ。だが、勇者パーティは国に所属するから、報酬は全部国に取られる。そんな事をさせられながら、最後は魔王と死ぬか生きるかの戦いをさせられる、究極の貧乏くじだ。

だから、正直に言えば、「追放してくれてありがとう」なんだよ！



俺がパーティを追い出されてから数日——ソロになった途端、俺の周りは騒がしくなった。ギルドに行けば毎日冒険者達に囲まれる。

「私達とパーティを組みませんか？ 私、ケインさんに憧れていました」

「俺のところに来ませんか？ 顔が良い女もいますよ？」

「ブラックウイングなんてクソだわ……だってリヒトさんのハーレムパーティじゃないですか。私達はケインさんの方が好きです。絶対満足させますから」

こんな具合で俺の周りに集まってくる人達に、俺は笑顔で対応した。

「誘ってくれてありがとう！ だけど今は好きな事をしたんだ」

これだけ人が寄ってくるのも無理はない。俺はソロでワイバーンだって狩れるのだ。そんな人材、どう考えても欲しいだろう？ ギルドの受付嬢だって、俺を見てソワソワしているよ。そりゃそうだ。これだけ使える冒険者はギルドも重宝する。だから俺は、リヒト達なんて気にしない。普通に幸せに暮らせるんだからな。早速新しいパーティメンバーを集めるか。まあ、ギルドの掲示板に募集を載せるだけだが。手続きを済ませ、ギルドの酒場で酒を飲みながらゆっくりしていると、長い金髪の女性が話しかけてきた。

「ちよっと話をさせてもらって良いだろうか？」

「別に構わないけど、メンバー募集の話かな？」

「そうだ。私の名前はアイシャ。Aランクでそこそ有能な方だと思っただが、メンバーとしてどうだろうか？」

「まさか、剣姫アイシャか……？」

確かジョブはクルセイダー。美しい剣技と容姿で有名な女騎士だ。

「俺で良いのかな？ アイシャさんみたいな方が入ってくれたら確かに嬉しいけど……」
俺が戸惑い気味に返すと、アイシャは語気を強くする。

「馬鹿を言うな！ ケイン様はSランクなんだぞ！ 私にとってあなたは雲の上の人だ」

俺はそれを聞いて頷く。

「じゃあ、採用で」

「本当なんだな！ 後で嘘とか言ったら泣くからな！」

「嘘なんて言わないよ……ただ、今はまだパーティメンバーが集まっていないから、活動は人数が集まってからになる」

「ならば問題はない……ほら！」

アイシャが指差した先には、水色の髪の女の子がいた。

「あの……私はアリス。アークウィザードをやっているわ。メンバー募集しているのよね？」

「採用」

「えっ……」

これまた大物だ。

アイスドールのアリス。魔法を得意とするジョブ、アークウィザードのAランクだ。アイスドールは、めったに笑わない事からついたあだ名らしい。

「そんな簡単に決めて良いのか？」

アイシャが尋ねてくる。

「うん、最初にパーティに入ってくれたのがクルセイダーのアイシャさん。メンバーのジョブのバランスを考えると、攻撃を担ってくれるアークウィザードは貴重な戦力だ。後は回復系の人がいれば……」

「それなら……おいメルル、早くこっちこっち！」

アリスがギルドの奥にいた女の子に声をかけた。

「メルルって……」

「メルルはアークブリストだから回復役としては最高よ！ 色々と恵まれてなくてまだBランクだけど、実力は私が保証する」

「よろしくお願いします……」

茶色いおかつぱ頭でマントを羽織った少女が頭を下げる。

「うん、よろしく。後は贅沢を言うなら荷物持ちとしてポーターが欲しいな……」

俺が呟くと、今度はアイシャが口を開いた。

「ポーターなら、あの子が良いだろう……収納魔法（大）が使える。クルダー！」

アイシャの呼びかけに応じてやってきたのは、くせ毛でおさげの女の子だ。

「はい。アイシャさん、どうしたんですか？」

「ケイン様のパーティ募集の枠があるけどどうだ？」

「え……ケインってあの勇者パーティのケイン？ そんなの入るに決まっていますよ！ 良いんですか？」

こちらを見上げてくるクルダに俺は頷いた。

「よし、これでメンバーは揃ったかな……」

あつという間にパーティが決まった。

俺は早速新パーティのミーティングを始める。

「今回は俺のパーティに参加してくれてありがとう」

そう言っ頭を下げると、アイシャが首を横に振る。

「何を言っているのだ！ Sランクであるあなたのパーティに入れてもらえるんだ。礼を言いたいのは私だ」

アイシャの言葉にアリス、メルル、クルダが同意する。

「私もそう思うわ」

「はい、あたしんです。でもあたしなんかで務まるんですかね……？」

「うちもCランクなんだけど大丈夫ですか？」

俺は不安そうな新メンバー達に、笑って答える。

「ああ、大丈夫だ。だが冒険を期待していたようならすまない。このパーティのモットーは無理をしない。そして、全員が楽しく暮らす、だ！」

「『楽しく暮らす！』」

声を揃えて驚く皆。だが、嫌そうな顔をする者は一人もいない。

「そうだ。簡単に言うと、皆でお金を稼いでのんびり暮らす。それ以上でもそれ以下でもない！それが嫌なら抜けてもらって構わない」

「ふむふむ……それで報酬の分配などはどうするのだ？」

アイシャが口にした疑問は当然のものだ。俺は説明する。

「基本は俺が管理する。最初の一カ月は報酬から生活費のみ支給する。そして残りのお金で、俺達のパーティハウス——つまり拠点を買うつもりだ。もちろん全員の共同名義でな。その後の報酬は六等分して、六分の一は貯金、残りを平等に分配でどうだ？」

俺が説明を終えると、メルルがおおずと聞いてくる。

「あの、あたしはBランクなんですが、同じ額をいただいて良いのですか？」

「構わないよ。皆、とりあえずそれでどうかな？ アイシャとアリスはAランクだけど大丈夫？」

「私は問題ない……Sランクのケインさんが同じ額なのに、文句なんて言わないさ」

「私だってそうよ。後方支援なのに贅沢なんて言えない」

アイシャとアリスも同意してくれた。

「それじゃ決まりだな！ そうだな、最初は稼がなきゃいけないし、ちょっと頑張ってワイバーンを狙ってみようか」

「[[ワイバーン!?]]」

「そう驚かないで！ 基本は俺がやる。皆は後方支援してくれば良い」

ワイバーンは亜種とはいえ立派な竜だ。

普通は人数を集めて、数で倒す方法をとる。

それをたった五人……一人はポーターだから実質四人で倒そうと言っているようなもの。驚くのも無理はない。

「ひとまず今日は解散して明日の朝、町の表門に集合だな。もし問題なく依頼をこなせたら祝杯を挙げよう！」

「[[はー]]」



翌朝——俺が待ち合わせ場所の門で待っていると、四人が揃ってやってきた。

「よし、行こうか？」

事前に馬車を用意しておき、必要な物は全部積んでおいた。

今回の依頼はワイバーンの素材回収。

つまりはワイバーン討伐だ。

わりと難度の高い依頼だが、準備は万全だ。

するとクルダが尋ねてくる。

「あの……御者は誰がするのですか？」

「それは俺がやるよ」

クルダをはじめ、メンバーの皆は一番ランクが高い俺に御者をやらせる事に気が引ける様子。まあ、そんな事はどうだっていい。俺は皆が乗り込んだのを確認して、馬車を出発させた。

馬車に揺られて三時間——ようやく目的の場所に着いた。

「さてと……ようやく到着したな」

「ここは……ワイバーンの岩場？ 大量のワイバーンが生息しているという……」
アイシャの呟きに俺は頷いた。

すると――

「ああ、私には無理だ……」

アイシャは卒倒しそうになる。俺は慌てて彼女を支えた。

「大丈夫だよ、アイシャ！ ワイバーンを倒すのは俺！ 君は仲間を守るだけで良い。とりあえず、アリスさんは視界に入ったワイバーンの翼に攻撃魔法を。メルルさんは適宜回復を頼む！」

こうして俺達のパーティの初戦が始まった。

「これが勇者パーティに所属したSランクの実力なのか……？」

そう呟いたアイシャの目の前には、もう十を超えるワイバーンが積まれている。

俺はこのワイバーンを全部たつた一人で倒した。

だが、まだまだいけるな。

「メルル、回復魔法は後何回使える？」

俺が尋ねると、メルルは元氣よく答える。

「たぶん、十回はいます」

「アリスはどうだ？」

「まだ大丈夫よ！」

「それじゃクルダ……どのくらい収納は可能だ？」

「後八体が限界です」

「よし、わかった」

その後もワイバーンを狩り続け、結局、十八体ものワイバーンを倒した。

普通のSランクなら一体が限界なので、十分な収穫といえよう。

「あのケイン様……」

「同じパーティなんだから、様をつけるのはやめよう、メルル。それでどうした？」

「なんで、ワイバーンをこんなに狩れるのですか？」

「それはメルルのおかげだよ！ 回復魔法でいつでも体力を満タンにしてもらえるからな。体力が尽きるまでいくらかでも狩れる。ありがとう！」

俺はさらに言葉を継ぐ。

「それにアイシャが皆を守ってくれるから、俺はワイバーン討伐に集中できる。アリスが翼を焼いてくれたから簡単に倒せだし、クルダが運んでくれるからたくさん討伐できた。皆の力だ」

少し恥ずかしくなってきたな……

でも、俺の本心だ。

「ケインにそう言ってもらえると助かる」

「ほぼ、固定砲台なのに……ありがとう」

「ただ、回復魔法使っていただけです」

「そんな事言い出したら、うちなんか最後に収納しただけですよ」

アイシヤ、アリスは頷いてくれたものの、メルル、クルダはまだ、自分の力に納得していないみたいだ。

「俺一人なら一体しか倒せなかった。それが十八体だ。皆、自分に自信を持ってい。それに、これで目的のパーティハウスが買える」

その時、俺はふと気になって聞いてみた。

「そういえば、今回の報酬を等分にしたらどれくらいになるんだ？」

その疑問にはアリスが答えてくれた。

「一人当たりワイバーン四体弱の計算だから……節約して十年、普通なら五年は暮らせるわね」

「それを一日で稼いだんだから凄いな」

アイシヤが呆れたように言くと、クルダがわなわなと震えていた。

「うち、ただのポーターですよ……こんな扱い初めてです」

俺はそんなクルダの頭をぼんぼんと叩いてから、皆を見回した。

「ひとまず、お疲れ様！ 今日はこちらまでにしてギルドに戻ろうか」

これでパーティハウスは手に入るかな。

俺はそんな期待を胸に、町へ向かった。

その日の夕方、町に戻ってきた俺達は早速ギルドに報告しに行った。

「お帰りなさい、ケイン様！ 依頼の方はどうでしたか？」

微笑みかけてくるギルドの受付嬢に、俺は上機嫌で答える。

「もちろん、こなしてきたよ。それで倉庫を使わせてくれないか？ 後、今日の報酬は即金で支

払ってもらえると助かる」

「良いですよ、そのくらい融通します。それじゃあ、倉庫に行きますか？」

「ああ、ちよつと待ってくれ……」

俺はそう言つて、傍らかたわにいるクルダに声をかける。

「クルダ、悪いけど倉庫まで付き合ってくれ。他の皆は酒場で飲み物でも飲んで休んで」

「了解しました」

「はい」

その後、受付嬢とクルダとともに倉庫に移動する。

「それじゃクルダ、出してくれ」

「はい」

クルダが収納魔法でしまっていたワイバーンを、目の前に積み重ねていく。

それを見た受付嬢は驚いて笑ってしまっていた。

「あはははっ、一体じゃなかったんですね？ 十八体！ 騎士団でも一体を相手にするのが精一杯なのに……とりあえず、ギルドマスターを呼んできます！」

そう言うのと、受付嬢は走って行ってしまった。

しばらくして、ひげもじゃでがっしりした体格の男、ギルドマスターのアウターが倉庫に入ってきた。

「久しぶりだな。ギルドマスター」

「やっぱりケインだったか……派手にやったもんだ。ワイバーンの買い取りと言ったな。だが、この数だと恐らく依頼料と合わせて金貨千枚ほどになる。さすがに即金は難しい」

この世界の金貨一枚は、日本円でおよそ十万円。千枚だと約一億円だ。

「だが、俺は今すぐパーティハウスが欲しいんだ」

俺が拠点の話を切り出すと、ギルドマスターはぼんと手を打った。

「なら話は簡単だ！ パーティハウスはギルドが斡旋^{あせん}している。そこから選んでもらって、ハウスの金額を差し引いた報酬を支払うよ」

「それなら構わない」

その後、メンバー全員で受付に行き、物件の情報をいくつか見せてもらった。

パーティハウスは皆が住む場所だ。全員が気に入らなければ意味がない。しかし、皆遠慮しているのか、なかなか決まらない。

だったら一番良いのにしとくか。俺は早速提案する。

「これなんかどうかな？ 部屋がたくさんあるからそれぞれ自分の部屋が持てるし、倉庫や調理場も十分だ。何より他の家と違って風呂場がある」

「だが、これ金貨五百枚だぞ！ 高額すぎないか？」

俺の選んだ家の資料を見たアイシャが、驚きの声を上げた。

アリスやメルル、クルダもうんうんと頷いている。

しかし、俺はこの家の有用性を主張する。

「君達は冒険者だけど、女の子でもあるんだよ？ この家がある地域は治安がいい。それにギルドも衛兵の詰め所も近いから安全だ！」

声高に説明する俺をまじまじと見つめる四人。

やがて渋々^{しぶしぶ}ながらも納得してくれた。

皆の許しを得た俺は、家の資料を見せてくれていた受付嬢に向き直って言う。

「それじゃ、このハウスにするよ。名義はパーティメンバー全員で」

「これにするんですね。かしこまりました。では、早速手続きいたします」

こうして俺達は最初の目標であるパーティハウスを、パーティ結成からわずか一日で手に入れた。



パーティハウスを購入した次の日。

俺達は新居で使う家具を買いに行く事にした。

待ち合わせ場所に到着すると、女の子達四人は既に揃っていた。

「皆、早いね……それじゃ買い物に行こうか。資金はたっぷりあるから、必要な物を全部買い揃えよう！ 元から持っている物があっても、くたびれているならこれを機に新品に買い替えても良いからね」

俺がそう言うのと、皆は顔を見合わせた。

「Aランクとはいえ宿屋暮らしだ。ろくに家具など持ってない。すまないが、全部買う事になる」

「私も同じ、持ち物は杖と着替えしかない」

アイシャの言葉にアリスも頷いた。

「あたしも似たようなものです」

「ポーターは稼ぎが少ないので……すみません、何も持っていません！」

メルルとクルダもすまなそうに俺を見てる。

だが、そんな事はなんの問題もない。

「心配しなくてもいい。俺も同じだ」

そもそも冒険者なんてしていれば、よほど安定して稼いでいない限り賃貸ちんたいすら借りられない。

冒険者として成功していても、家を持たず宿で生活している者が大半だ。

だから、皆が装備と着替えくらいしか持っていないなくても驚かない。

俺だって勇者パーティにいたが、お金は勇者であるリヒトが管理していたので、大金を使う機会などなかった。

「さて、大きい物から買おうか……まずは家具からかな」

俺達は早速家具屋へと向かった。

到着した家具屋で、俺達は店内を見て回る。

この世界では全ての家具がオーダーメイドだ。

なので店に置いてある物は、中古品かサンプルという事になる。

工場などの生産ラインがないからそれほど不思議ではないのだが、この世界に来た当初は驚いた記憶がある。

全ての家具で全員の希望を聞いていたらきりがないので、全員で使う物は俺が頼んで、各自の部屋の家具は各々で注文する事にした。

「お金は気にしないで良いよ！ 家具は長く使う物だからよく考えて頼んで」

「[[[[はる]]]]」

その後は俺も自分なりのこだわりを伝えて、家具を注文した。

思ったよりも時間がかかるらしく、家具の完成まで約三週間との事。

完成したら配達してくれるそうだ。

寝具やカーテンや絨毯じゅうたんのみならず、調理器具なども同じくらいの時間がかかるらしい。

そうなると思う物は、食器や小物しかない。

だが、それらは今あっても仕方ないので後日買う事にした。

俺は皆に確認する。

「これで、必要な物は全部注文し終わったかな？」

アイシャが首を傾かたむけながら言う。

「こういった経験がないからわからないが、たぶん大丈夫ではないか……？」

「皆宿屋暮らしだったんだから仕方ないわ。足りなければ後で買えば良いのよ」

きっぱりと言うアリスに、メルルとクルダは頷く。

「そうですね……自分がパーティハウス持ちのメンバーなんだって、今頃になって実感してき

した」

「ポーターなのに部屋持ち……信じられません」

なんだかんだ言って皆、満足のいく買い物ができたのかな。

「今日はもうやる事はないし、そのあたりでお茶でも飲みながら少し話さないか？」

パーティを結成してまだ二日しか経たっていない。

これから一緒に暮らすのだから、親睦しんぼくを深めておいた方がいいだろう。

そう思っの提案だったが、皆乗り気きのようだ。

「そうだな！ パーティの連携は重要だし、意思疎通いしそつうをスムーズにするためにもそのような場は重

要だ」

「そうね」

「あやし暇ですから大丈夫です」

「うちもちろん暇です」

アイシャ、アリス、メルル、クルダは元気よく返事してくれた。

それから俺達は喫茶店のような場所で、今後の事を色々と話し合った。

「昨日のワイバーン狩りで思ったより稼げたから、生活費もかなりの額を分配できるな。家具がない間はハウスもほとんど使えないから、今のうちにお金を分けておこう」

「それは助かるな。一人当たりどのくらいになる？」

俺はアイシャの質問に答える。

「そうだな……後でパーティのお金が足りなくなると困るから、今回は金貨二十枚ずつにしようと思う。どうかな？」

「金貨二十枚……そんな大金良いの？」

アリスがびつくりしたように聞き返してきた。

メルルとクルダも困惑気味だ。

「あの……あたしはBランクですが、そんなに……？」

「う、うちはポーターです。金貨なんて手にするのは初めてです」

金貨二十枚だと、日本円にして二百万円くらいになる。

確かに大金ではあるが、アイシャやアリスは冒険者ランクが高く、そこそ名前も売れている。このくらいの金額なら、稼いだ事もあると思っていたが。

皆今までどのような待遇を受けてきたのだろうか……気になるな。

まあ、今はランクだとかそんなものは関係ない。

俺の目標は“無理をしないで全員が楽しく暮らす”だ。

「三週間もあるんだ。まずはそのお金でゆっくりしてくれ。今泊まっている宿の支払いもあるだろう？ それに今後は、月に金貨四十枚ずつ分けられるようにするつもりだ。一応、パーティとして活動するのは週に三日くらいで、残りは休みにしようと思っている」

俺がそう伝えたと、アイシャが慌てて尋ねてくる。

「そのペースで金貨四十枚は、かなり厳しいのではないか？」

「あくまでこれは目標だ。だが、実現できると俺は考えている」

「どうだろうか……そんな夢のような生活ができるならしてみたいが……」

アイシャはなおも不安そうだ。

アリス、メルル、クルダもアイシャと同じような考えらしい。

「それは、冒険者なら誰もが送ってみたい生活ね」

「夢の先にある夢みたいなものですね」

「実現すればうちは世界で一番幸せなポーターになります」

まあ、最初は皆疑問に思うだろう。

だが、実現できるかどうかの不安はあれど、皆反対という感じではない。

「それじゃ、今日はこれで解散しよう。俺は家具はないがハウスの方になるべくいるようにする。その方が連絡も取りやすいだろう。何かあったら来てくれ。それじゃあ、また」

そうして俺は店を後にして、購入したばかりのハウスに向かうのだった。



ケインが去った後、アイシャ達はその場に残り、話をしていた。

ケインのパーティに入ってから二日の間にイベントがありすぎて、彼女達は頭が追いついていなかった。

最初に口を開いたのはアイシャだ。

「Sランクって凄いな……」

「凄いななんてものじゃないわ。たった一日で金貨千枚よ！ ありえない！ しかも、普通の人なら自分の取り分を多くするのに……均等に分けるなんて信じられないわ」

アリスが語気を強めた。

アイシャもうんうんと頷く。

「確かにありえないな……私はただ立っていただけだ」

「私だって、数発魔法を放っただけだわ……正直に言うけど、パーティに入れてくれたのって体目当てかと思ったの」

勢いよく話すアイシャとアリスを、メルルとクルダは呆然と見ている。

「ケインに関してはそれはありえないだろうな……彼がその気になれば、いくらでも可愛い奴隷が買える」

「そうなのよ！ さっきもらった金貨二十枚で美女奴隷が買えるわ」

アイシャもアリスも、自分の容姿が並み以上である事は十分自覚している。

幾度となく言い寄られた経験がある二人だったが、ケインからは全く下心を感じないのだ。アリスは続けざまに言う。

「正直私はそういう関係になっても良いと思ってたわ。それで人生が保証されるなら十分と思っていたの」

「私はそこまで打算的ではなかったが、それで、Sランクのパーティに入れるならとは考えたな」その時、アイシャはふと感じた事を口にした。

「それにしてもアリス。お前は『アイスドール』なんて言われているから、あまり喋らない奴だと思っていたんだが……」

「私は元々こういう性格なの。その名前は周りが勝手に呼んでるだけよ」
そこでようやくメルルとクルダが口を開いた。

「アイシャさんやアリスさんが好待遇なのはまだわかりますよ。Aランクで立派な二つ名までついているんですから……あたしなんてBランクの無名冒険者です。そんなあたしがパーティに入れてもらえるなんて」

「うちもまさかこんなに良くしてもらえるなんて思っていなかったです。ポーターなんて『運び屋』とか言われて蔑まれる存在ですからね」

この世界ではジョブによる格差が存在する。戦闘で活躍するクルセイダーなどは重宝されるが、ポーターのような地味なジョブは低く見られがちだ。

だが、アイシャは首を横に振った。

「ポーターでもクルセイダーでも変わらないさ。何せ相手は元勇者パーティ所属のSランク。ケインから見れば私達は皆同じようなものだ」

話が一段落したところで、皆で冷えたお茶をすすする。

すると、今度はメルルが話し始めた。

「あの……皆さん、仕事の話ばかりですが、ケインは凄い美形ですよ？ 艶のある黒髪に黒目、体は鍛えられているけど決して筋肉ダルマじゃなくて細い。しかも肌なんて女のあたしよりきめ細

やかで綺麗なんですよ！」

クルダも同意する。

「そうですよ、あれは反則です！ 勇者パーティにいた時はきつと目立たないようにしていたんですよ」

その後も話は過熱していき、気付けばもう夜になるうかという時刻だった。

これだけ話していれば欠点の一つも出てきそうだが、ケインに関しては全くなかった。

「まあ、私達を拾ってくれたケインの期待に応えられるよう、これから一緒に頑張っていこう」
最後にアイシャがそう締めくくり、今回のお茶会はお開きとなった。



家具が来るまでの間、何もせずにいるのも退屈なので、俺ケインは家の掃除をする事にした。せっかくパーティハウスを手にしたのだから、綺麗にして皆を迎えようと思っていたんだが……これが案外難しい。

とにかく家が広すぎるし、掃除道具なども揃っていない。

早々に自力での掃除を諦めた俺は、ギルドを頼る事にした。

ギルドに着き、受付に向かう。

「依頼を出したいんだが……」

「Sランク冒険者のあなたが依頼を受けるのではなく出すのですか？　どのような内容でしょう？」

受付嬢だけでなく、ギルドに居合わせた冒険者全員がこちらに聞き耳を立てている。

Sランク冒険者が依頼を出すのがそんなに珍しいか？

「ただの掃除の依頼だからFランクか見習いで十分だ……ついでに掃除のコツを教えてくださいる奴だと助かる」

受付嬢は頷いた。

「わかりました。そういう依頼なら、一人当たり銅貨三枚も出せば良いと思います。何人必要ですか？」

掃除してもらう範囲が広いし、人数が少ないと可哀想だな……

「なら、六人ほど頼めるか」

受付嬢は再度頷いて、依頼書を作成する。

彼女がそれを貼り出した瞬間、子供の冒険者がひつたくるように依頼書を持っていった。

「ケイン様、この依頼は僕達で引き受けても良いかな？」

依頼書を手にした男の子の冒険者が、俺に尋ねてくる。

「もちろんだよ。ついでに掃除の仕方も教えてくれないか？」

「了解、任せておいて！」

すぐに依頼に取りかかりたいと言うので、仲間を連れてきた彼を早速パーティハウスに案内し掃除を始めてもらう。

子供とはいえ、こういう依頼には慣れているのだろう。あつという間に家が綺麗になっていく。

そして、俺は……隅で休んでいた。

依頼書を持ってきた男の子が呆れたように笑う。

「はははっ、Sランクのケイン様でも苦手な事があるんだな」

そう、俺は掃除が壊滅的に苦手な事がわかった。

今まで旅をしていてずっと宿屋暮らしだったから、掃除なんてした事がない。

馬車の御者もできるし料理もできるのに、まさか掃除がこままでできないとは思わなかった。

邪魔をしちゃいけないので、掃除は彼らに任せる事にしたのだ。

三時間ほど経った頃には、家がぴかぴかの状態になっていた。

「それじゃ、依頼書にサインをくれるかな？」

子供達を代表して、先ほどの男の子が依頼書を俺に渡してくる。

「はいよ……後これ、お駄賃だ」

俺は通常の報酬に加えて全員に銅貨を一枚ずつ渡した。

「ほら皆、ケイン様が追加報酬をくれたぞ。お礼を言おうぜ」

「「「ありがとうございます」」」

声を揃えて頭を下げる子供達に、俺は笑顔で応える。

「また何かあったら頼むよ」

彼らは笑顔で帰っていった。

俺は綺麗になったパーティハウスを改めて見て回る。

勇者パーティの時はしょっちゅう野営やえいをしていたが、ここには風呂とトイレ、自分の部屋まである。

家具が届くまでは三週間ほど。それまでは毛布一つあれば十分だろう。

俺は何かあった時に対応しやすいように、入口に一番近い部屋を自室にした。

他は皆で話し合って決めていけば良いと思う。

後は家事なんかができる人がいればなあ……

他のメンバーも俺と同じく冒険者だし、家事は期待しない方がいいだろう。

家事をしてくれる人がいたらかなり助かるのだ。

皆に相談する必要があるかもしれない。



パーティハウスに着々と家具などが届き始めた頃――

よく考えれば、家事だけでなくハウスの留守番や管理をする人間が必要だと気付いた。

これは俺だけで決めてはいけない事だ。

「すまないが、急ぎうちのメンバーを一人、誰でも良いから捜さがしてきてほしい」

前世ならスマホがあるから楽だけど、今はこうやってギルドに頼まなければならない。

こんな事なら泊まっている宿屋を聞いておくべきだった。

「そうですね、それならまた見習い冒険者に依頼しましょう」

すると、またもやあつという間に、依頼書を手にした見習い冒険者の女の子がやってきた。

「ケイン様、これ私が受けても良いよね！」

「うん、お願いするよ。俺のパーティメンバーから誰でも良いから一人連れてきて」

「わかった！」

彼女はかなり優秀で、三十分ほどで見つけてきた。

「はい、捜してきました、確認のサインをください」

「早いね……はい、これでいいかな。後これ、お駄賃ね！」
俺はお駄賃として銀貨二枚を手渡した。

「さすがケイン様、太っ腹！ ありがとう！」

「ご苦労様！」

彼女が連れてきてくれたのはクルダだった。

「ケイン、どうしましたか？ 急用ですか？」

不思議そうに尋ねてくるクルダに、用件を伝える。

「いや、ちょっと付き合っしてほしいんだ……」

「どこに行くのかわかりませんが……了解しました」

「それじゃ、お願いする」

そうして俺はクルダを連れて目的の場所に向かった。

「あの、ケイン……ここは奴隷商ですが……まさか、うちを売り飛ばす気ですか!？」
急にこんなところへ連れてこられてクルダは驚いたらしい。

「何を言ってるんだ……俺がそんな事するわけないだろ？ 大事なパーティーメンバーなんだから。
ここには奴隷を買いに来たんだ」

それでもクルダの不安は拭えなかったらしい。
今度は別の心配をされた。

「あの、ケイン……そういうのが必要ならうちに言ってください……ちゃんとお相手します
よ……？」

「だから、違うんだ！」

俺はハウスの管理をしてもらう奴隷が必要な事を、クルダに一から説明した。

「あつ、そういう事ですね……あはははっ、うち誤解しちゃいました」
納得してくれたようで何よりだ。

「さあ入るか」

「はい」

俺がクルダを促して店に入ると、店員らしき男が声をかけてきた。

「これは、これは……またケイン様に来ていただけるとは光栄です。今日はどんな奴隷をお探
すか？」

この店員は俺の事を知っているらしい。

そういえば前に一度来た事があったな。

俺は早速希望を伝える。

「そうだな……女が良いかな」

俺の言葉にクルダがぎよつとしていたが、説明するのも面倒だしもう無視しておこう。

「女ですか？　そういう事なら、とびつきり美人の性処理奴隷がおりますよ！」

こいつもクルダと同じ勘^{かん}違^{ちが}いをしているのか……

俺は仕方なく説明する。

「違う、違う……家事奴隷が欲しいんだ！　大体そういうのが欲しいなら女性同伴で来るわけないだろ」

「ふむ、そうでしたか。ですが、今は家事奴隷がちょうどいいんです。先日貴族の方がまとめて買っついていかれました」

なるほど、少しタイミングが悪かったか。

「そうか、まあ家事ができれば良いから、人族で年齢が高い人から見せて……」

「はい、わたしは料理とか掃除が得意ですよ！　二十七歳です」

俺が店員に伝え終わる前に、店の奥の方から声が聞こえてきた。

店員が怒^ど鳴^なりつける。

「お前は黙っている！　誰も買わねーよ！」

「わたしだってここから出たいんです！」

店員の怒鳴り声に負けじと、その女性の声も大きくなる。

俺は気になって店員に尋ねる。

「あの、その人……自分から売り込んできたんだし、見せてもらえませんか？」

「いや、見ても良いですが……気を悪くしないでくださいよ」

俺達は声の主の女性^{めい}が収容^{おさ}されている檻^おの前に来た。

その女性は髪^{かみ}の毛^けが黒くて黒目、可愛らしい顔つきをしていた。

「ねっ、ケイン様。見るだけ無駄^{むだ}だったでしょう？」

「これは……ケイン」

店員とクルダが俺の方を見てくる。

しかし、俺には何が無駄なのかわからない。

確かにこの世界の寿命は約五十歳だから、二十七歳はもうおばさんだ。

だが、その他に特筆^{とくひつ}すべき問題はないように思える。

「まさか、犯罪奴隷なのか？」

気になって聞いてみると、店員は首を横に振った。

「貧乏農家の嫁^{よめ}でしたが、子供も産めないからと売られてきたんです。どうしてもお金にしたいという事だったので、なんでもあり」という条件で私が買いました」

「それだけ？」

「だって、黒目、黒髪的女ですよ……」

店員の言葉に俺は少しむっとして言う。

「俺だって黒目で黒髪だ」

すると店員は半ば呆れたように説明した。

「はあく良いですか？ 男の黒髪はカラス髪、女の黒髪は闇髪やみがみと言うんです。男の黒髪はカラスのように艶やかだと評価される一方、女の黒髪は闇みたいで好まれない。当たり前じゃないですか」

そんな事は初めて聞いた。俺はクルダの方を見る。

「そうなのか？ クルダ」

「ええ……男の黒髪はいいけど、女の場合は最悪です……常識ですよ」

俺がこの世界に来てかなりの年月が経っているが、ずっと旅をしていた事もあつてまともに物を知らない。

だから他の皆から見れば最悪なこの女性も、俺の目には素敵すてきなお姉さんとしか映らない。

俺は店員に確認する。

「ちなみに買うとしたらいくらだ？」

「本当に買うんですか……銀貨一枚です」

異常に安いな。

理由を聞いてみると――

「誰も買わないような奴隷ですよ！ ただでさえ黒髪だから価値は低い。二十七歳だから女としても価値はない！ お店に置いているのは、なんでもありの奴隷が安く買えるという宣伝のためですよ」

俺はクルダをちらと見やる。

彼女は俺が買いたいならと、頷いてくれた。

「じゃあ、この人を購入しようかな？」

「嘘、本当に買ってくれるんですか!？」

驚きの声を上げたのは、売り込んできた女性の奴隷本人だった。

店員も驚きと呆れを隠そうともせずに、手続きの説明をする。

「奴隷は銀貨一枚ですが、奴隷紋どれいもんに銀貨四枚かかるので合計銀貨五枚になります」
「構わない」

そうして俺は銀貨五枚を支払い、その女性の奴隷に奴隷紋を刻んでもらった。

「これで、こいつはケイン様に逆らさかえません。逆らえば激痛が走りますから」

奴隷紋についての説明を聞き終えると、俺達は奴隷商を出た。

そういえば、自己紹介をしてなかったな。

「俺はケイン、こっちがクルダだ。君の名前を覚えてくれるかな？」

女性性は頭を下げて名乗った。

「はい、シエスタと申します」

こうして家事の不安は奴隷を購入する事で解消された。

奴隷商を後にした俺達は服屋に来ていた。

シエスタがあまりにも酷い服装なので、着替えを買ってあげようと思ったのだ。

ここで俺が服を選んであげられれば格好良かったかもしれないが、残念ながら俺にはそのセンスがない。

「シエスタ、好きな服を選んで買ってくれ。俺はこういうのに疎い。後は生活に必要な物も揃えてくれ」

「あの……ケイン様、わたしは奴隷ですよ？ 本当に良いんですか？」

不安そうにこちらを見上げてくるシエスタ。

俺は頷いた。

「気にしないでいいぞ。そうだ、クルダが見てあげてくれないか？」

「はい、わかりました！」

クルダは元気にシエスタの服を選び始める。

しかし、よく見るとクルダの服もあまり良い物ではないな……

俺はクルダに尋ねる。

「おい、クルダ。この前金貨二十枚も渡したのに、なんで服を買ってないんだ？」

「実を言うと、うちもおしゃれとは無縁で……」

クルダは申し訳なさそうに言った。

俺はそれならと、店員を呼んだ。

「すみません、彼女達に似合いそうな服をそれぞれ五着くらいと、女の子が普段から必要な物一式を選んでもらえませんか？」

「わかりました、お任せください！」

二人に選ばせるといつまで経っても決まりそうにないからな。

ややあって店員が選んできた商品をまとめて購入する。

早速買った服をシエスタに着てもらった。

今まで奴隷商で閉じ込められていたから、まだ清潔感はちよつと足りない。

それでもかなりましになった。

これで、飯屋に入る分には問題ないだろう。

「あの……こんなに洋服買ってもらって良かったのですか？」

シエスタはまた不安そうに聞いてくる。

「気にしないで良いよ。それじゃお腹も空いたし、飯でも食うか……クルダも一緒にどうだ」

「お供します！ 後、うちの服まで買っていたきありがとうございます」

俺は笑って頷くと、二人を連れて服屋を出た。

俺達は近くにある、ちよつと高級な飯屋のテラス席についた。

そこでクルダとシエスタの椅子を引いてあげたのだが……

「どうした、座らないのか？」

シエスタに尋ねると、彼女は恐る恐る聞いてくる。

「あの……ケイン様、わたしは奴隷ですよ？」

確かに主人によつては奴隷を座らせない者もいる。

この店でもそういう奴がいるが……

「俺は気にしないから座ろう」

「……はい」

心なしか嬉しそうにシエスタは席についた。

俺はこほんと咳^{せき}ばらいをして、改めて宣言する。

「いいか、俺達が目指すのは、全員が楽しく暮らすパーティだ！ ポーターだから、奴隷だからって言うのはもうやめてくれ」

「あのですね……うちはそういう贅^{ぜい}沢に慣れてなくて……」

クルダの言葉^{ことば}を遮^{さへり}って、俺は言う。

「それでもだ。すぐには無理かもしれないけど、君はSランクの俺のパーティメンバーだ。おしゃれをして贅^{ぜい}沢にしても誰も文句言わない。俺のためにも人生を楽しめ」

「ケインのため、ですか？」

「ああ。メンバーのクルダが楽しくなさそうだと、俺も楽しくないからな！」

これだけは胸を張って言える。

クルダも納得してくれたようだった。

「そうですね……はい、わかりました」

「よし、話はおしまい！ 今日俺が奢^{おご}るから美味^{おい}しい物を食べよう！ クルダもシエスタも好きな物を頼んでくれ」

「はー」

返事は良かったものの、彼女達はなかなかメニューを決められなかった。
結局は……

「すみません、ミノタウロスのステーキ三つ……これでいいか？」

「はい」

彼女達が贅沢に慣れるのはまだまだ先になりそうだ。

飯を食べ終わった後、俺達はシエスタの家具を注文して解散しようとしていた。

別れ際、シエスタが尋ねてくる。

「そういえば、ケイン様はどこに住んでいらっしゃるのですか？」

「今はパーティハウスにいるけど……シエスタが泊まれる環境じゃないし、今日は宿屋にしようかな」

シエスタの家具は注文したばかりなので、ハウスに彼女の寝る場所がないのだ。

「わたしの事なら気になさらないでください。藁わらの上で寝ていた事もありましたから」

「藁？」

「はい、農村での暮らしなんてそんなものです。ベッドがあるのは裕福な家ですね」

なんとも悲しい話を聞いてしまった。

「……それなら寝具を買ってハウスに帰ろう。それで良いか」

「はい、十分です！」

するとクルダがはい、と元気よく手を挙げた。

「ちよつと待つてケイン！ それならうちも行きたいです。ポーターも野営が多いから、地べたに寝るのも慣れていきますし」

「わかった。でも、部屋の割り振りは皆が揃ってから決めるからな」

「はい！」

そうして俺達は三人でハウスに向かって歩き始める。

「あの……そういえばさっき家具を買っていただきましたが、置ける部屋があるんでしょうか？」
道すがら、シエスタが尋ねてきた。

俺は頷いて答える。

「もちろん、シエスタの部屋もあるよ」

「っ！ ありがとうございます！」

その後、シエスタとクルダの寝具を買って、そのままハウスに帰ってきた。
いったん部屋に荷物を置いて集まる。

「シエスタとクルダは奥のお風呂を使うと良いよ。そっちの方が大きいからね。男は俺一人だから